様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2014
課題番号：２３６５２０８６

研究課題名（和文）琉球語祖語の再建：琉球語の系統を探る

研究課題名（英文）Reconstruction of Proto-Ryukyuan: Looking into the genealogy of the Ryukyuan language

研究代表者
島袋　盛世（Shimabukuro, Moriyo）

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：００３６３６５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：琉球祖語を近隣の地域の祖語と比較分析した結果、現段階では借用語などの存在から言語接触の可能性はあるが、これらの言語間には系統関係があるとは言えない。今後さらに詳しい比較分析研究を進めて行く必要がある。また、先学の研究で指摘されている琉球語と近隣地域の言語との関係に関する議論を精査する必要もある。この場合、琉球語の研究者だけでなく、韓国語、オーストロネシア諸語、アイヌ語の研究者との協力も必要となる。

研究成果の概要（英文）：As a result of this research, it can be concluded for the time being that there is no clear evidence to claim that the Ryukyuan language is related to the Austronesian languages, Korean, or Ainu. Apparently more research needs to be done. We also need to look into the existing hypotheses regarding the genealogy of the Ryukyuan language (e.g., such as a Austorenesian-Ryukyuan hypothesis).

研究分野：人文学（言語学）

キーワード：歴史言語学　琉球語　系統　祖語の再建

１．研究開始当初の背景

近年、琉球･沖縄人の起源と成立に関して考古学や形質人類学など研究分野を超えて積極的に議論が行われており、言語学においても近隣の地域の言語との比較研究を行い超研究分野の議論に積極的に参加し貢献しなければならないと考え本研究の着想に至った。

琉球大学の平成 22 年度研究プロジェクト支援事業（若手研究者支援研究費）の支援を受けて「琉球語の変遷の研究」（平成 22 年 9 月～平成 23 年 3 月まで）を進めていたが、研究費支援期間が半年なので、分析する語彙や音韻体系に限りがある。本研究において「琉球語の変遷の研究」の研究成果をさらに発展させたいと考えた。

また、本研究の代表者は歴史比較言語学が専門であり、過去に日本語・琉球語のアクセント体系の再建及び変遷について研究実績（著書や論文）があり、琉球･沖縄人の起源に関する超研究分野の議論に貢献できると考えたため本研究を申請するに至った。

本研究が研究期間内に明らかにすることは以下の５つである。

(1)音韻・アクセント体系の分析を基に特徴をまとめ、琉球語の下位区分を行う。

(2)上記の(1)に基づき、下位区分の祖語（例えば、八重山祖語、宮古祖語、沖縄祖語、奄美祖語など）の音韻体系と語彙を再建して、下位区分の祖語の特徴を示す。また、音韻体系や語彙を共時的・通時的観点から比較分析し、琉球語でみられる音韻変化の傾向をまとめる。

(3)上記の(2)に基づき、琉球語祖語の音韻・アクセント体系と語彙を再建し、その特徴を示す。

(4)琉球語祖語から(2)で再建した諸祖語、さらに下位区分諸祖語から現代琉球語諸方言へ変遷していった過程を解明する。

(5)近隣地域の言語と比較し、琉球語特有の語彙の語源を明らかにする。

言語だけを分析して祖語や変遷過程を再建するのではなく、琉球語話者の歴史的・文化的な背景も考慮に入れて、歴史比較言語学の「比較方法」により八重山方言祖語、宮古方言祖語、沖縄方言祖語、奄美方言祖語、そして琉球語祖語を再建し、琉球語の系統を明らかにすることである。

予想される結果：琉球語は九州方言と類似点が多く、過去のある時点で九州方言から分岐してできたという説が有力であるが、語彙等を比較することにより、琉球語が接触した言語や接触の時期などが明らかになると同時に、琉球語が独特の特徴を発達させた経緯の解明に繋がるため、本研究の学術的な意義は大きい。

また、調査報告書、紀要論文、辞書、未出版の原稿等様々な形の文献に紹介されている琉球語の語彙や音韻に関する資料を一カ所に集約でき、データが容易に利用できるようになる。

２．研究の目的

琉球･沖縄人の起源と成立に関して考古学や形質人類学など研究分野を超えて積極的に議論が行われており、言語学においても近隣の地域の言語との比較研究を行い超研究分野の議論に積極的に参加し貢献しなければならない。そのためには共時的・通時的観点から琉球語を分析し、琉球語の系統を明らかにしておく必要がある。本研究の具体的な目的は以下に列挙する 5 つ。(1)奄美諸島から先島諸島までの広い範囲で話されている琉球語の音韻体系の比較･分析を行うこと。(2)琉球語の基本語彙を基に、歴史比較言語学の観点から祖語を再建すること。(3)琉球語における言語変化の特徴を明らかにし、琉球語下位分類を試みること。(4)祖語から現代琉球語諸方言への変遷過程を説明すること。(5)琉球語特有の語彙の語源の探求。

３．研究の方法

書籍、調査報告書、紀要論文、辞書などの資料を基に、琉球語、アイヌ語、オーストロネシア語族の言語、韓国語などの基本語彙を収集する。本研究で使う基本語彙は身体･親族･時間空間･天体･気象･道具･動物･植物･代名詞･動詞･形容詞から成る Swadesh の基本語彙 100 項目（Swadesh 1971:283）を含む 381 項目。

また、琉球語と比較対象になるアイヌ語、オーストロネシア語族の言語、韓国語などの祖語に関する資料も同時に収集する。例えば、*The Austronesian languages* (2009 Robert Blust, Pacific Linguistics. Camberra: Australia.)はタガログ語やオセアニアで話されている言語などの祖語と変遷、そして *A reconstruction of proto-Ainu*. (1993 Alexander Vovin, Leiden: E.J. Brill.) にはアイヌ語祖語と変遷について議論されている。このような資料は琉球語の系統や他言語との接触を探求する際欠かせないものとなる。

次に、整理した琉球語語彙のデータを比較し、音の規則的対応関係を探る。たとえば、波照間の pusu（星）pani（羽）と首里の husi（星）hani（羽）等を比較することにより、波照間と首里の間には p:h の音の規則的対応関係があることがわかる。次に、言語一般にみられる規則的音変化と琉球語特有の音変化および音韻体系の変化の分析を行う。また、不規則変化の整理・分類し琉球語の下位区分を行い、他の言語との接触に起因する変化や世代間のギャップに起因する変化など歴史と照らし合わせて不規則変化の説明を試みる。例えば、p > h の変化は言語一般にみられる弱音化、u の前の k が f へ変化するのは琉球語特有の変化で、同系の日本語にはみられない。また、有声破裂音の無声化は体系的な変化の例。このような変化を整理、分類して琉球語内の音変化の傾向を分析する。

奄美諸方言、沖縄諸方言、先島諸島諸方言（宮古、八重山、与那国）においてそれぞれの諸方言を比較し奄美祖語、沖縄祖語、先島祖語を再建する。祖語を再建する上で重要となるのは諸方言間における規則的音対応の分析、381 項目におよぶ基本語彙の比較である。次に、再建した奄美、沖縄、先島の祖語からそれぞれの諸方言への変遷過程を前年度後期で分析した音変化を使い解明を試みる。規則的変化や琉球語特有の変化で説明不能な不規則的変化は方言間の接触や人の移住なども含め不規則変化に起因する外的圧力の可能性を探る。

再建した奄美祖語、沖縄祖語、先島祖語の基礎語彙の比較、そして祖語間に存在する規則的音対応の分析に基づき琉球語祖語の再建をする。次に、琉球語祖語から奄美、沖縄、先島の祖語への変遷の解明を試みる。変遷過程の説明は前期で行った同様の方法で行う。

再建した琉球語祖語語彙及び音韻体系と近隣地域の言語との比較分析し、琉球語と系統が同じ可能性がある言語が近隣地域にないか探る。

４．研究成果

琉球語諸方言、琉球祖語、アイヌ祖語、オーストロネシア祖語の基礎語彙 381 項目のデータを整理し、ホームページで公開。データは随時アップデートし、閲覧者が使い易いよう整理する。

言語接触により借用された語彙などを除き、琉球祖語をオーストロネシア祖語およびアイヌ祖語の語彙や音韻体系を比較した結果、現段階では借用語などの存在から言語接触の可能性はあるが、これらの言語との系統関係があるとは言えない。さらに詳しい比較分析を行い、それぞれの言語の音韻体系間において規則的な対応があるかどうか研究を進めて行く必要がある。また、先学の研究で指摘されている琉球語と近隣地域の言語との関係を細かく議論を精査する必要もある。この場合、琉球語の研究に携わっている研究者だけでなく、韓国語、オーストロネシア諸語、アイヌ語の研究者との協力も必要となる。

今後の展望としては、本研究は現時点での一応の結果はでたが、まだ本研究テーマは完結してはいない。本研究で行った琉球語の分析、アクセントを含む音韻体系の比較分析をまとめ、公開していく。また、今回扱った他の言語の音韻体系の再建および現代言語への変遷過程に関わる研究は今後も続ける。継続研究の結果は今回立ち上げたホームページで随時公開する計画である。さらに、上述した先学の研究についても研究分析を継続する。

<引用文献>

① Swadesh, Morris. (1971) *The origin and diversification of language*. Edited post mortem by Joel Sherzer. Chicago: Aldine.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 4 件）

①<u>島袋盛世</u>「琉球語の系統を探る（中間報告）」，沖縄言語研究センター，2014 年 1 月 11 日，琉球大学.

②<u>島袋盛世</u>「‘あきつ’と‘がげろふ’の語源について–歴史言語学的考察–」，沖縄言語研究センター，2012 年 6 月 9 日，琉球大学.

③<u>島袋盛世</u> Omoro saushi and the history of the Ryukyuan language, The International Workshop ‘Modern Perspectives on Ancient East Asian Texts，2012 年 6 月 9 日，ハワイ大学マノア校（アメリカ）.

④<u>島袋盛世</u>「琉球語祖語アクセントの再建」，沖縄言語研究センター，2011 年 7 月 9 日，琉球大学.

〔図書〕（計 1 件）

①<u>島袋盛世</u>「琉球語をさかのぼる」『知の源泉　やわらかい南の学と思考』，査読無、5 巻，2013 年、20-23.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

①「琉球語・方言データベース（仮）」
http://w3.u-ryukyu.ac.jp/ling/index.html
（随時データをアップデートしている。ホームページ名称は仮。今後的確な名称を検討す

る。）

６．研究組織
(1)研究代表者
島袋　盛世（SHIMABUKURO,Moriyo）
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号： 00363656

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：